

## 概要

従来、*that* 痕跡効果は ECP (空範疇原理) 等によって説明されてきたが、原理とパラメータのアプローチで使用されていた概念が破棄されたことで、今日では、極小主義に基づく様々な分析が行われている (プロソディーの観点に基づく研究も存在する)。しかし、*that* 痕跡効果は標準英語に観察されるものであり、方言差 (地域差) が存在する。近年のラベル理論 (Chomsky (2013, 2015)) の想定に従うと、英語の T は弱いため、主語 *wh* 句は *that* 節内から移動出来ず、*that* 痕跡効果の方言差を説明することは困難である。そこで本論では、ラベル理論の観点から *that* 痕跡効果の方言差を再考し、主語 *wh* 句が問題となる *that* 節から移動可能となる派生を提案する。具体的には、フェイズ  $Ph_n$  の Transfer は、直上のフェイズ  $Ph_{n+1}$  における Phase Level Operation が完了した時点で適用されると主張する。また、本提案は、他の統語現象へと拡張可能な分析であることを議論する。

## 1. ラベル理論における *that* 痕跡効果の説明と問題点

以下に示すように、標準英語では、主語 *wh* 句を *that* 節内から抜き出すことは出来ない。

### (1) \*Who do you think [ that ~~who~~ loves Mary ] ?

上記のような *that* 痕跡効果に対して、これまでの先行研究では、“*that*-trace filter”や、ECP、EPP (拡大投射原理)、NIC (主格島条件)、Subject Criterion (主語基準)、“(anti-) locality”等、様々な分析が提示されてきたが、近年のラベル理論では、英語の T が弱いと想定することで (cf. Chomsky (2015))、

(1) の様な場合の非文法性が説明されている。

- (2) a.  $\{\beta C \{\alpha \text{Who}_2 T \{\text{R-v}^* \text{Who}_1 \text{R-v}^* \dots\}\}\}$  ( $\alpha = \langle \varphi, \varphi \rangle$ )  
 b.  $\{\beta \text{Who}_3 C \{\alpha \text{Who}_2 T \{\text{R-v}^* \text{Who}_1 \text{R-v}^* \dots\}\}\}$  ( $\alpha = ??$ )

(2a) に示すように、(*that*-)CP フェイズ段階で *who* が TP 指定部に留まる場合は、一致によって T の強化は可能になるが、Transfer を受けた *who* はそれ以上移動出来ない。一方で、(2b) のように *who* が CP 指定部へ移動すると、当該のコピー要素は最小探査から非可視化されるため、T を強化することが出来ず、派生が破綻する。つまり、いずれの移動派生においても、派生の破綻が生じることが理論的に予測される。しかし、この説明には、様々な理論的かつ経験的な問題が指摘されている。

第一に、英語の T が弱いとする想定は、非定型節における T のラベル付けの問題など、理論的な矛盾を抱えていることが多くの先行研究で指摘されており、*that* 痕跡効果への有効な説明手段とはなり得ない (cf. Hayashi (2020))。そして第二に、主語 *wh* 句が CP 指定部へ移動することを示す様々な証拠が多くの先行研究で提示されており (e.g. Bošković (2019), Messick (2020) a.o.)、実際に、(1) のような文を容認する話者が存在することが経験的に実証されている (cf. Sobin (1987, 2002))。

これらの事実を考慮すると、*that* 痕跡効果に見られる方言差を、ラベル理論の観点から説明することは、極めて困難な問題と言えるだろう。

## 2. 先行研究 (McInnerney (to appear))

ラベル理論の観点から *that* 痕跡効果の方言差を説明する文献は (筆者の知る限り) 未だ少なく、ここでは一例として McInnerney (to appear) の分析を概観していく。

McInnerney は、Chomsky (2015) の想定では *that* 痕跡効果の方言差を説明出来ないと主張し、(3)に示すように、主語 *wh* 句が CP 指定部を経由して主節へ移動する派生を提案している。

(3)  $\{_{CP1} \text{Who}_4 \text{ do } \{_{TP1} \text{you think } \{_{CP2} \text{Who}_3 \text{ that } \{_{TP2} \text{Who}_2 \text{ T } \{_{R-v*} \text{Who}_1 \text{ loves Mary}\}\}\}\}\}$ ? (= (1))

Chomsky (2015) の想定に従うと、上記のような派生では、TP2 指定部における *Who*<sub>2</sub> の非可視性から T のラベル付けが不可能となるが、McInnerney は、Minimal Search (MS) が適用される TP2 領域内では *Who*<sub>2</sub> が *Who*<sub>3</sub> から c 統御されないため、*Who*<sub>2</sub> は非可視化されず T の強化が可能になり、派生は収束すると主張している。つまり、(1) のような文は、派生的には容認可能ということになる。

しかし、既に述べたように、英語の T が弱いとする想定は *that* 痕跡効果への有効な説明手段とはなり得ない。さらに、McInnerney に従うと、上位フェイズによる MS が適用される TP1 領域内では *Who*<sub>3</sub> が *Who*<sub>4</sub> から c 統御されないため、XP-YP 構造を形成する CP2 のラベル付けが不可能となる。この問題を回避するためには、ラベリングの遅延や、Transfer を既に受けた領域への MS 適用など (cf. McInnerney (to appear: 9-11, (24-26))), いくつかの追加の理論的概念・メカニズムを現行の理論に実装する必要があるが、これは、“simplicity”を追及する極小主義の精神とは合致しない。

また、McInnerney (to appear) では、(1) の様な例を容認しない話者の場合の統語派生については一切提示されておらず、当該の問題に対しては、単にプロソディー上の問題だとしているが (cf. Kandybowicz (2006), Sato and Dobashi (2016)), プロソディーに基づく分析にも考慮すべき問題が存在することが一部の先行研究で報告されている (e.g. Ritchart et al. (2016), Toquero-Pérez (2020)).

### 3. 提案 (No-Weak Heads, Transfer via Higher Phase, One-Fell-Swoop-Movement)

#### 3.1. 弱主要部の棄却

Hayashi (2020) は、全ての主要部は強いと提案した上で、*that* 痕跡効果の非文法性を説明している。

(4)  $\{\delta \text{Who}_3 \{\gamma \text{that } \{\beta \text{Who}_2 \{\alpha \text{T}_{[u\phi]} \{_{R-v*} \text{Who}_1 \text{ love Mary}\}\}\}\}\}$  ( $\alpha=\beta=T$ )

Hayashi の想定に従うと、T は強いため、(4) のように主語 *wh* 句が CP 指定部に移動してもラベル付けの問題は生じない。しかし、*who* との一致が行えず、T に継承された  $[u\phi]$  素性の値付けが不可能となり、インターフェイズで派生が破綻するため、*that* 痕跡効果が生じることになる。<sup>1</sup>

#### 3.2. Transfer via Higher Phase

本論では、Hayashi (2020) に従って「全ての主要部は普遍的に強い」と想定し、さらに、「フェイズ  $\text{Ph}_n$  の Transfer は、直上のフェイズ  $\text{Ph}_{n+1}$  における Phase Level Operation が完了した時点で適用される」と提案することで (= (5a)), Chomsky によって提唱されたラベル理論の貢献を維持しつつ、*that* 痕跡効果における方言差を再考する。

(5)a.  $\{\text{PH}_{n+1} \dots \{\text{PH}_n, \text{XP}\}\}$  ( $\text{PH}_{n+1}$  による MS  $\Rightarrow$   $\text{PH}_n$  の補部である XP が転送)

b.  $\{\dots \text{R}(\text{think}) \{_{CP} \text{that } \{_{TP} \text{Who}_2 \text{ T } \{_{R-v*} \text{Who}_1 \text{ loves Mary}\}\}\}\}$  (*that* 痕跡効果を容認する話者)

(5a) は、フェイズ主要部  $\text{PH}_{n+1}$  における Phase Level Operation によって、 $\text{PH}_n$  を主要部とする集合に MS が適用される段階を示している。<sup>2</sup> 本論では、当該の MS によって、 $\text{PH}_n$  を主要部とするフェイズラベルが同定された後、 $\text{PH}_n$  の補部である XP に Transfer が適用されると主張する。この想定に

<sup>1</sup> C が  $[u\phi]$  を保持する場合に生じる問題に関しては Hayashi (2020) 及び Suenaga (2022) を参照。

<sup>2</sup> 本論では、Chomsky (2015) における派生に従い、Phase Level Operation は以下の順序で行われると想定する。

(i) Feature Inheritance  $\Rightarrow$  MS  $\Rightarrow$  (Internal Pair-Merge)  $\Rightarrow$  Transfer

従うと、 $v^*P$  フェイズにおいて  $R$  との Pair-Merge を受けた  $v^*$  は MS に非可視化されるため (cf.  $R-v^*$  amalgamation (Chomsky (2015))), 当該の補部に Transfer が適用されないことが自然に導かれる。つまり、フェイズ  $Ph_n$  の Transfer は、直上のフェイズ  $Ph_{n+1}$  によって駆動されることになる。そして (5b) に示すように、本想定に従うと、CP フェイズが形成された段階では TP に Transfer は適用されないため、 $Who_2$  は  $T$  との一致の後に主節へ移動可能となり、派生は収束することになる。

### 3.3. One-Fell-Swoop-Movement

近年、主語  $wh$  句が TP 指定部を経由せずに CP 指定部へ移動することが、英語やイタリア語方言、イディッシュ語など、多くの言語で指摘されている。(cf. Messick (2020), Suenaga (2022))。そこで本論では、Messick (2020) 及び Suenaga (2022) の分析を援用し、*that* 痕跡効果を示す話者の場合では、(6) のように主語  $wh$  句が TP 指定部を経由しない移動派生が行われると提案する。

(6)  $*\{ \dots R(\textit{think}) \{_{CP} Who_2 \textit{that} \{_{TP} T_{[u\phi]} \{_{R-v^*} Who_1 \textit{loves Mary} \} \} \} \}$  (容認しない話者)

現行のラベル理論における Free Merger の観点を考慮すると、上記のような移動派生を妨げるものは何もない。さらに  $T$  は強いため、ラベル上の問題も生じない。しかし、上記の派生では、 $T$  に継承された  $[u\phi]$  素性の値付けが出来ずに派生は破綻するため、*that* 痕跡効果が生じることになる。

よって、本提案に従うと、問題を抱える弱主要部の想定や McInnerney (to appear) の提案に頼ることなく、ラベル理論の貢献を維持した上で、*that* 痕跡効果の方言差の説明が可能となる。

## 4. That と Null-C による対比

### 4.1. 問題点

本論では、主語  $wh$  句の移動派生の違いから、*that* 痕跡効果に見られる方言差の説明を行ったが、興味深いことに、*that* 痕跡効果を容認しない話者でも、以下のように *that* が顕在化されない場合では、主語  $wh$  句の抜き出しは可能になる。

(7) a. Who do you think [~~who~~ loves Mary] ?

b.  $*\{ \dots R(\textit{think}) \{_{CP} Who_2 C \{_{TP} T_{[u\phi]} \{_{R-v^*} Who_1 \textit{loves Mary} \} \} \} \}$

(7b) に示すように、本論の想定に従うと、この場合でも  $T$  に継承された  $[u\phi]$  素性の値付けは不可能なので、派生が破綻することを誤って予測する。Chomsky (2015) では、*that*-deletion を想定することで  $T$  の強化を可能にする派生が提案されているが、何度も述べて来たように、 $T$  が弱いとする想定は *that* 痕跡効果への有効な説明手段とはなり得ない。また本論では、弱主要部の想定を棄却し、さらに主語  $wh$  句は TP 指定部を経由せずに CP 指定部へ移動すると提案しているため、そのような手段を利用することも出来ない。よって、(7) の文法性を説明出来ないことになる。

### 4.2. Salvation by T-to-C Raising

本論では、Suenaga (2022) の分析に従い、TP 指定部を経由しない主語  $wh$  句への主格付与は T-to-C raising によって可能になると想定することで、(7) の文法性が説明可能となる。一般的に、英語における主格付与は、主語と finite-T との間の一致によって可能になると考えられてきた (cf. Chomsky (2001))。従って、以下の (8a) に示すように、Pair-Merge によって  $[u\phi]$  素性を持つ  $T$  と  $C$  が amalgam Head を形成することで、 $Who_2$  と  $T(T_{[u\phi]}-C)$  との間の一致 (主格付与) が可能になる。また、上位フェイズ  $v^*$  による MS 適用時に、 $Who_2$  と T-C との間の共有素性から CP のラベル付けが可能

となり、McInerney のような提案や追加のメカニズムに頼らずとも、派生は問題なく収束する。

- (8) a. { ... {CP Who<sub>2</sub> T<sub>[vφ]</sub>-C {TP  $\bar{T}$  {R-v\* Who<sub>1</sub> loves Mary }}}} (一致による主格付与、CP=<φ, φ>)  
 b. \*{ ... {CP Who<sub>2</sub> that {TP T<sub>[uφ]</sub> {R-v\* Who<sub>1</sub> loves Mary }}}} (主格付与は不可能)

一方で、(8b) に示すように、C に *that* が顕在化する場合は T-to-C raising が行えず、<sup>3</sup> [uφ]素性の値付けと、それに伴う主格付与が不可能となり、派生が破綻するため、当該の対比 ((6) vs. (7a)) が生じることになる。よって、*that-deletion* の想定に頼らずとも、(7) の文法性は説明可能となる。

## 5. 本提案の拡張

### 5.1. CP フェイズを含む句の移動

本提案に従うと、Chomsky (2013: 42) や Obata (2017) で議論されている以下のような場合の派生に関しても、説明が可能になる。(9a) のような例で問題となるのは、CP フェイズを含む *wh* 句が文頭に移動している点である。というのも、CP フェイズ形成時点で、その補部である TP は既に転送されているはずであり、CP フェイズを伴う当該の *wh* 移動は不可能だと予測される。

- (9) a. Which claim [that John was asleep] was he willing to discuss? (Chomsky (1993: 36))  
 b. { ... R(*discuss*) {DP which claim {CP that {TP John was asleep }}}} }

一方で、本論の想定に従うと、(9b) に示すように、CP フェイズ形成時点では TP に Transfer は適用されないため、CP フェイズを含む *wh* 句 (*Which claim that John was asleep*) の移動が可能になる。

### 5.2. 束縛現象

#### 5.2.1. 原理 C

さらに、Quicoli (2008) における束縛原理の分析を援用し、R 表現とそれを c 統御する DP との間の別指示関係はフェイズレベルで確定すると想定することで、再構築操作や優先原理などに頼らずとも、(9) のような場合において、*John* と *he* が同一指示され得ない事実が説明可能となる。

- (10) a. \*Which claim that John<sub>i</sub> was asleep was he<sub>i</sub> willing to discuss? (=9a)  
 b. { he { v\* { R {DP which claim {CP that {TP John was asleep }}}} } } }

(10b) に示すように、本分析に従うと、CP フェイズ形成時点では *John* を含む TP は転送されないため、*he* が派生に導入される v\*P フェイズレベルにおいて、*he* は R 表現である *John* にアクセス可能となり、それらの間の別指示関係が確定することで、*John* と *he* が同一指示され得ないことになる。

一方で、以下のような adjunct-CP では、*John* と *he* の同一指示が可能になる。

- (11) a. Which claim that John<sub>i</sub> made was he<sub>i</sub> willing to discuss? (Chomsky (1993: 36))  
 b. { he { v\* { R {DP which claim {CP that {TP John made ... }}}} } } }

本分析に従うと、CP フェイズ形成時点では *John* を含む TP は転送されないため、この場合においても、*John* と *he* が同一指示され得ないことを誤って予測する。しかし、Chomsky (2004) の分析を援用し、adjunct-CP には Pair-Merge が適用されると想定することで、当該の対比が説明可能となる。

- (12) a. <<sub>α</sub> which claim {CP that {TP John made ~~which claim~~ } } > (Pair-Merge of *which claim* and CP)  
 b. { he { v\* { R <<sub>α</sub> which claim {CP that {TP John made ~~which claim~~ } } > } } }

<sup>3</sup> 顕在的な *if* や *will* などによって、仮定法倒置の T-to-C Raising や *be* 動詞の V-to-T Raising は不可能となる。

(i) a. Had John done that ..., / \*If had John done that ...,  
 b. John is not there. / \*John will be not there.

(12a) は、関係詞節である adjunct-CP と *which claim* との Pair-Merge によって集合  $\alpha$  (=DP/QP) が形成される段階を示している。そして重要なことに、Pair-Merge を受けた当該の CP は syntax から非可視化されるため、(12b) に示すように、*he* が派生に導入される v\*P フェイズレベルにおいて、*he* は当該の CP 内の要素にアクセス不可能となり、別指示関係は成立しないことになる。<sup>4</sup>

### 5.2.2. “Picture of Self”

本提案に従うと、Chomsky (1981) 等で議論されている以下のような例に対しても、“*i-within-i filter*” のような想定に頼らない、新たな説明が可能となる。

(13) a. John<sub>i</sub> believes that a picture of himself<sub>i</sub> will be on show at the exhibition.

b. { John { v\* { R { CP that { TP a picture of himself will be ... } } } } }

(13b) に示すように、CP フェイズ形成時点では、照応形の *himself* を含む TP は転送されないため、*John* が派生に導入される v\*P フェイズレベルにおいて、*John* は *himself* にアクセス可能となり、それらの間の同一指示関係が成立可能となる。

しかし、この想定の下では、以下の様な例を説明出来ない可能性がある。

(14) a. \*John<sub>i</sub> believes that himself<sub>i</sub> is the best student.

b. { John { v\* { R { CP that { TP himself is ... } } } } }

(14b) に示すように、本提案に従うと、この場合でも v\*P フェイズレベルにおいて *John* は *himself* にアクセス可能となり、それらの間の同一指示関係を誤って予測する。しかし、上記の非文法性は、同一指示関係によるものではなく、Case-mismatch によるものだと考えられる。通常、*himself* 等の照応形には対格が付与される。しかし、(14) における *himself* は主格付与位置に生起しており、対格付与が行えないため、派生が破綻すると予測される。事実、以下の様な例では、*John* と *himself* の同一指示が可能となる。

(15) a. John<sub>i</sub> thinks that himself<sub>i</sub>, Mary likes.

(Lasnik and Saito (1992: 110))

b. John<sub>i</sub> believes himself<sub>i</sub> to be the best student.

この場合、*himself* は R (*like/believe*) の指定部へそれぞれ移動し、それらの間の一致によって対格付与が可能となり、派生が収束する。従って、(14) との対比は、格付与の観点から引き出される。

### 5.2.3. 原理 C 再考

本提案では、以下の様な複数の CP が存在する場合の束縛が問題になるかもしれない。

(16) a. \*He<sub>i</sub> thinks that Mary thinks that Cathy thinks that John<sub>i</sub> loves cars.

b. \*He<sub>i</sub> thinks that Mary thinks that Cathy thinks that Hilda loves John<sub>i</sub>.

上記のような場合、*he* と *John* の間には複数のフェイズが介在するため、*he* が *John* にアクセス不可能となり、別指示関係が成立せず、それらの間の同一指示関係を誤って予測するかもしれない。しかし、Hayashi (2020) の分析に従い、素性継承が随意的であると想定すると、*he* と *John* の間の別指示関係が成立する可能性が生じる。

Hayashi に従うと、(16) のような bridge verb の派生では、[u $\phi$ ]素性の継承を経ずに R (*think*) と v\*

<sup>4</sup> Root CP における Transfer によって集合  $\alpha$  が転送を受ける段階で、Pair-Merge を受けた当該の CP に SIMPLE 操作が適用される (cf. Chomsky (2004), Hayashi (2022)).

の Internal pair-Merge が行われることで、v\*は、フェイズをマークする[uφ]を保持したまま非可視化されるため、v\*P フェイズがキャンセルされることになる。<sup>5</sup>

(17) {R-v\*<sub>[uφ]</sub> {R {CP that {TP ...}}}} (No-Inheritance of [uφ] ⇒ R-to-v\* raising ⇒ Phase Cancel)  
Transfer はフェイズによって駆動される操作であるため、当該のフェイズキャンセルに伴い、上記の場合では Transfer が適用されないことになる。

本論の提案に従うと、フェイズ Ph<sub>n</sub> の Transfer は、直上のフェイズ Ph<sub>n+1</sub> によって駆動されるため、(16)における各 CP フェイズへの Transfer 適用は、直上のフェイズである v\*P によって駆動される。しかし、各フェイズレベルにおいて、v\*と R (*think*)の Internal Pair-Merge が適用された時点で v\*P フェイズは随時キャンセルされるため、それによって直下の CP フェイズへの Transfer 適用はキャンセルされると想定する。

(18) {he {R-v\*<sub>[uφ]</sub> {R {CP that ... {R-v\*<sub>[uφ]</sub> {R {CP that ... {R-v\*<sub>[uφ]</sub> {R {CP that ... John ...}}}}}}}}}}}}  
よって、主節の v\*P フェイズレベルにおいて、he は R 表現である John にアクセス可能となり、別指示関係が確定するため、he と John が同一指示され得ないことが予測可能となる。<sup>6</sup>

### 5.3. Weak Transfer と PIC (the Phase-Impenetrability Condition)

最後に、ここでは、Weak Transfer と PIC の観点から本分析の再考を行う。(9)で既に見た様に、CP フェイズを含む wh 移動は可能なため、Chomsky (2013) や Obata (2017) では、「Transfer が適用された統語対象物は派生から消失しない」と想定されている (i.e. Weak Transfer)。さらに Chomsky, Gallego, and Ott (2019) では、PIC 効果の対象となるのは、後のサイクルで Transfer を受けた集合の内部構造を変更するような操作であり、それを遵守していれば、転送領域への Internal Merge や Agree などの操作が適用可能であると主張されている。つまり、Transfer を受けた統語対象物が派生から消失することは無いとすれば、CP フェイズを含む wh 移動や、(一種の Agree 操作と見なされる) DP 間の指示関係は、本論のような提案をせずとも、説明可能となるかもしれない。<sup>7</sup>

しかし、そのような想定に基づいたとしても、that 痕跡効果の方言差を説明することは出来ない。

(19) {Who<sub>3</sub> ... {CP that {TP Who<sub>2</sub> T<sub>[vφ]</sub> {R-v\* Who<sub>1</sub> loves Mary }}}}}

Transfer 適用後に統語対象物が派生から消失しないとすれば、(19)に示すように、that-CP フェイズ内の主語 wh 句には、T との一致の後でも移動操作の適用が可能となり、派生が収束することを予測する。しかし、当該の移動操作によって、Transfer 領域となる CP フェイズの内部構造 (TP) が後のサイクルで変更されるため、PIC 効果の違反が生じる。<sup>8</sup> 従って、上記のような移動は不可能であり、that 痕跡効果の方言差を説明することは出来ない。一方で、本提案の下では、当該の CP フェイズ形成段階では Transfer は適用されないため、PIC 効果の違反は生じない。

よって、本提案に従うと、(たとえ Transfer を受けた統語対象物が派生から消失しないとしても) PIC を遵守した上で、これまで議論してきた現象を統一的に捉えることが可能になる。

<sup>5</sup> つまり、v\*P における Phase Level Operation は完了せず、途中段階で停止する。

<sup>6</sup> \*John<sub>i</sub> thinks that Bill likes (a picture of) himself<sub>i</sub> の様な例に関しては、今後の課題とする。

<sup>7</sup> これらの操作は、CP フェイズ自体の内部構造を変更するものではないので、PIC の違反にもならない。

<sup>8</sup> Cf. Chomsky, Gallego, and Ott (2019: 241) “[S]uppose X is raised from within P[hase] by I[nternal] M[erge]. If syntactic objects are defined as sets of occurrences, it follows that P subsequently no longer contains X, since it does not contain the set of X’s occurrences. Consequently, inter-phasal IM is barred by the PIC, as it affects the internal constitution of previously-transferred P[.]”

## 6. まとめ

本論では、フェイズ  $Ph_n$  の Transfer は、直上のフェイズ  $Ph_{n+1}$  における Phase Level Operation が完了した時点で適用されると主張することで、ラベル理論の観点から、*that* 痕跡効果の方言差を生じさせる統語派生(主語 *wh* 句の移動派生の差異)を提示し、他の現象へと拡張可能な分析であることを示した。

### 【参考文献】

**Bošković, Željko (2019)** “Generalized Asymmetry,” ms., University of Connecticut. / **Chomsky, Noam (1981)** *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht. / **Chomsky, Noam (1993)** “Minimalist Program for Linguistic Theory,” *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Keyser, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA. / **Chomsky, Noam (2001)** “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA. / **Chomsky, Noam (2004)** “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford. / **Chomsky, Noam (2013)** “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49. / **Chomsky, Noam (2015)** “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simon Matteini, 3-16, John Benjamins, Amsterdam. / **Chomsky, Noam, Ángel J. Gallego and Dennis Ott (2019)** “Generative Grammar and the Faculty of Language: Insights, Questions, and Challenges,” *Catalan Journal of Linguistics Special Issue*, 229-261. / **Hayashi, Norimasa (2020)** “Labeling without Weak Heads,” *Syntax* 23, 275-294. / **Kandybowicz, Jason (2006)** “Comp-Trace Effects Explained Away,” *Proceedings of the 25th West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Donald Baumer, David Montero, and Michael Scanlon, 220-228, Somerville, MA. / **McInnerney, Andrew (to appear)** “The Position of *Wh*-Subjects in Labeling Theory,” *Linguistic Inquiry*, 1-16, doi: [https://doi.org/10.1162/ling\\_a\\_00470](https://doi.org/10.1162/ling_a_00470). / **Messick, Troy (2020)** “The Derivation of Highest Subject Questions and the Nature of the EPP,” *Glossa* 5, 1-12. / **Obata, Miki (2017)** “Is Transfer Strong Enough to Affect Labels?,” *Labels and Roots*, ed. by Leah Bauke and Andreas Blumel, 117-126, Walter de Gruyter, Berlin. **Quicoli, A. Carlos (2008)** “Anaphora by Phase,” *Syntax* 11, 299-329. / **Ritchart, Amanda, Grant Goodall and Marc Garellek (2016)** “Prosody and the That-Trace Effect: An Experimental Study,” *Proceedings of the 33rd West Coast Conference on Formal Linguistics*, 320-328. / **Sato, Yosuke, and Yoshihito Dobashi (2016)** “Prosodic Phrasing and the That-Trace Effect,” *Linguistic Inquiry* 47, 333-349. / **Sobin, Nicholas (1987)** “The Variable Status of Comp-Trace Phenomena,” *Natural Language & Linguistic Theory* 5, 33-60. / **Sobin, Nicholas (2002)** “The Comp-trace Effect, the Adverb Effect and Minimal CP,” *Journal of Linguistics* 38, 527-560. / **Suenaga, Kodai (2022)** “On the Derivation of *Wh*-Subject Questions in English,” *Kyushu University English Review* 64, 85-110. / **Toquero-Pérez, Luis Mguel (2020)** “That-Trace Effects Are Yet to Be Explained Away: Challenges for Prosody-Based Accounts,” *Lingbuzz* (<https://ling.auf.net/lingbuzz/005548>).